

## 滋賀県障害者文化芸術活動推進計画検討懇話会 第 1 回会議（平成 30 年 11 月 21 日）結果概要

### 1 議題

- (1) （仮称）滋賀県障害者文化芸術活動推進計画の策定について
- (2) 障害者による文化芸術活動の推進に向けた取組について
- (3) 各委員からの御意見等

### 2 主な意見

#### <計画の方向性に関する意見>

- 滋賀県のオリジナリティーを十分議論して、実りある計画になってほしい。
- 総花的な計画ではなく、特徴的なことに特化した計画にするのであれば、他の自治体でも取組があまりない「販売」、課題となっている「人材育成」、滋賀県が弱い「発信」の 3 つがポイント。
- アール・ブリュットを今後もやっていくことが、滋賀県と他の自治体との差異化になる。それには当然近代美術館が中核になっていくと思うので期待している。
- 鑑賞機会について、情報保障だけではなく、知的障害や発達障害等、特性に合った鑑賞の機会を充実させることを考えることも大切。
- 裾野から高みを伸ばしていくのには福祉で出来る限界がある。福祉から文化振興にバトタッチできるような連携も滋賀県では可能ではないか。

#### <拠点整備に関する意見>

- 人材育成のためには、恒常的に練習が見られたり、参加できたり、地域の子どもたちが遊びに来たり、生活の中に出会いの場を作っていく必要がある。
- 近代美術館が共生社会の一端を担う存在として不十分に終わった場合、県立の共生文化芸術センターを提案したい。障害者が子どもや高齢者、市民と交流しながら、芸術活動を通して共生社会をつくっていく拠点、県内はもとより全国規模の様々な実践や研究、人材育成、発信もできるような拠点、恒常的にパフォーマンスができるような拠点の整備を前向きに検討いただきたい。

#### <人材育成に関する意見>

- 特に舞台芸術分野の人材不足が課題。例えば、鑑賞現場や表現活動の現場など、具体的にどの場所でのどういう人材が不足しているのか整理する必要がある。音声ガイドや字幕を作る人材も不足している。
- 地域のホールでも障害者を受け入れていこうという意欲はあると思うが、研修をしても短期の契約社員ばかりが増えているため、ノウハウが引き継がれない。
- 発表の機会やそれを創作する場の提供、それをどうホールや専門のところとつないでいけば良いのか、中間支援を行う人材が大きな課題と感じている。

#### <その他>

- 民間の例えばダンス教室など、障害者が行こうとしたときに断られるという現状も多いので、広い意味での文化芸術の意識が、計画を進めることで変わっていけば良いと思う。
- 障害者の作品やパフォーマンスを芸術として見る目が育っていない。どうすれば障害者が活き活き活動し、そして色々な人の目に触れて素晴らしいと思ってもらえるように、どう支えていけば良いのか議論したい。

**滋賀県障害者文化芸術活動推進計画検討懇話会**  
**第2回会議（平成31年3月20日）結果概要**

**1 議題**

- (1) （仮称）滋賀県障害者文化芸術活動推進計画 骨子（案）について
- (2) その他

**2 主な意見**

**＜骨子の全体、基本理念、基本的な方針、等について＞**

- 提示された内容は、美術分野だけでなく、舞台芸術分野においても、充実されており、しっかり書き込まれた内容となっている。
- 障害のある作家やアーティストは、養護学校の教員や福祉事業所等の支援者などに見出されることで活躍の機会を得ることが多い。よって、そうした身近にいる方の意見をしっかり反映したものにしてほしい。
- 障害のある人が文化芸術活動をとおして、人に喜んでもらう、認められる、社会に評価されることで、その人の自信にもつながるとともに、家族や支援者など周りの人にとっても意識の変化が起こると感じている。
- 福祉事業所では、就労を目指しながらの活動が多く、文化芸術活動に対する無関心層が多い。そうした事業所等の支援者や特別支援学校の教員等が、本計画によって文化芸術活動に関心を示すことのできる、意識を変えていくような具体的な取組が示されることを期待したい。
- 本計画の策定によって、障害のある人の芸術を鑑賞する側の意識の変革も起きてくるのではないか。
- 糸賀一雄先生の言葉でもある「この子らを世の光に」の思想が生きるような取り組みが必要と感じる。

**＜施策の方向性、具体的な取組について＞**

- 文化施設や文化事業者、学芸員、アーティスト等が福祉分野の専門家等から、障害の特性やその支援方法を学ぶことができる機会を設けることも必要ではないか。
- 福祉の現場の職員と文化芸術分野の人が、お互いにスキルや意識を相互に持つことで、障害のある人の文化芸術活動が豊かになるのではないか。
- 著作権や所有権、作品等の売買について、障害のある芸術家やその家族がそうした対応に困らないような環境になることが大切。
- 舞台芸術を創る際は、創る側にとって必要な人材と、共感して一緒に関わろうとする多種多様な人を探し求めあう状況にあり、特に障害のある人が行う場合は、そうした出会いが難しくなりがちである。共感を持つ多様な人材が出会えるための情報発信とともにネットワークを構築することが大切。
- 発表の機会が、文化施設等だけではなく、商店街の空き店舗等、より身近な場所で行うなどの取組により、多くの人前で発表できる「場」の拡大に向けた取り組みも考えるべき。

- 障害者の文化芸術活動をととして、多様な人の価値観が集積する「場」を生み出すことは非常に重要ではないか。
- 障害の有無に関わらず文化芸術に触れあい、誰もが「いいよね」と発信者になるためには、県民を含め多様な人が集い文化芸術に触れあう「場」が県内各所にあり、そうした「場」で気楽にかかわりあうことで、支える人や障害のある芸術家等を見出すことにもつながり、活動の広がりをみせるのではないか。
- 障害者の文化芸術活動の推進計画は、共生社会の実現を目指して、障害のある人となない人が文化芸術活動をととして一緒に何かいいものを創っていこうというための計画であり、一緒に集う「場」の問題といろいろなことを諦めず取り組んでいくことが大切。
- 障害のある人となない人が文化芸術という、一種の娯楽を共有できる空間・拠点が必要になるのではないか。

## これまでの取組

### 1 〈歴史〉障害者福祉施設での造形活動

- 戦後まもなくから近江学園など県内の多くの福祉施設等で、障害ある人の自由な造形活動が広がりをみせた
- 1981年から始まった「土と色」展等の開催により、滋賀の障害のある人の生み出す作品が数多く見いだされてきた

### 2 〈転機〉NO-MAの開設

- 2004年、障害のある人の作品とプロの作品とを分け隔てなく展示する「ボーダレス・アートミュージアム NO-MA」が開設
- 2008年に「アール・ブリュット／交差する魂」展等、障害のある人の作品を発掘・展示を積極的に行うNO-MAの活動を支援

### 3 海外での展覧会開催

- 2010年にフランス・パリで開催された「ART BRUT JAPONAIS」展では、滋賀県からも多くの作家が作品を出展。
- その後も2017年にフランス・ナントで開催された「日本のアール・ブリュット「KOMOREBI」展」等、多くの作家の作品が海外で高い評価を受ける。

### 4 滋賀県の取組

- 造形活動の環境づくりや作品を後世に伝えていくための支援等、早くから福祉行政と文化行政が連携した取組を進める。
- 障害者アート公募展の開催や、県内の旅館など民間施設等でアール・ブリュット作品を展示する等、発表機会や鑑賞機会の提供
- 権利保護や著作権保護に関する相談支援、研修等を行うなど、障害者の文化芸術活動への支援
- 障害者の舞台芸術活動を担う人材の育成に資するワークショップ、研修等の実施
- 県立近代美術館では、滋賀の美の一つとしてアール・ブリュット作品の調査・収集の実施
- アール・ブリュットの機運醸成を図るための全国組織として、「アール・ブリュット ネットワーク」を設立・運営
- 特別支援学校の児童・生徒をびわ湖ホールに招いた、本格的な実演芸術の鑑賞機会の提供

## 推進にあたっての課題

- 文化を創造し、享受することは人々の生まれながらの権利であることから、とりわけ一概に文化芸術活動の環境が十分とはいえない障害者等に配慮する必要  
→鑑賞サポートの実施割合(あり・予定あり):15.2%(H29)
- 障害福祉サービス事業所において、障害のある人の特性を理解しながら造形活動や表現活動を支援できる人材が不足している。  
→障害のある人の造形活動に関する相談件数:527件(H28)

## 基本理念

障害の有無にかかわらず、文化芸術活動を通じて自分らしく活躍できる共生社会の実現

## 基本的な方針

多様な人々が支えあうことにより、障害のある人が障害のない人とともに、多彩な文化芸術活動に親しみ、活躍する環境づくり

## 計画の期間

2019年度から2025年度(7年間)

## 施策の方向性

### 「親しむ」

障害のある人が障害のない人と同じように文化芸術活動に鑑賞し、参加し、創造する機会の充実を図る。

### 「つなぐ・支える」

障害のある人が文化芸術活動を通じて、自らの能力を最大限発揮し、障壁なく社会参加できるよう支援するための場・人づくりを図る。

### 「活かす」

滋賀県の障害のある人が多く作家として活躍するアール・ブリュットをはじめ、県内で障害のある方が創りだす作品等を効果的に発信し、県民の理解を深めるとともに、滋賀県固有の魅力として本県のブランド力の向上を図る

## 具体的な取組

- ◆ 滋賀県のオリジナリティーをどう表現するか  
→ 滋賀の先駆性をどう表現するか
- ◆ 造形活動と表現活動の比重について  
→ 造形活動:これまでの経験等の蓄積に基づいた取組のどのように進めるのか  
→ 表現活動:鑑賞機会の拡大に向けた取組や糸賀記念音楽賞等の取組を糧に創造・参加機会の充実をいかに図っていくのか
- ◆ 県立文化施設やNO-MA、やまなみ工房等とともに、恒常的に活動できる、相談できる、研修等ができるなどの人づくり・場づくりをどのように進めていくとよいのか  
→ 創造活動、鑑賞機会の拡大  
→ 人材養成に向けた研修機会の充実  
→ 中間支援組織としての相談機能強化  
→ 情報発信の場づくり

## 滋賀県の主な上位計画

滋賀県基本構想	<b>【基本理念】</b> (1) 自分らしい未来を描ける生き方 (2) 未来を支える 多様な社会基盤 <b>【施策の方向性】</b> 誰もが居場所や生きがいをもち、障害を通じて自分らしく活躍できる社会づくりを推進 多様性を認め、互いに支えあう共生社会づくりを推進
滋賀県文化振興基本方針(第2次)	<b>【基本目標】</b> 滋賀の文化力を高め、発信することで地域が元気になっていく姿 <b>【3つの柱】</b> ①文化プログラムの推進による文化的資産の活用・発信 ②未来の文化の担い手の育成 ③県民の主体的な文化活動の促進
滋賀県障害者プラン	<b>【基本目標】</b> 地域でもともに暮らし、ともに学び、ともに働き、ともに活動することの実現 <b>【重点施策】</b> 8. 障害のある人のスポーツ、文化・芸術活動の推進

## 国の計画との整合

(1) 鑑賞の機会の拡大(法第9条)	(7) 文化芸術活動を通じた交流の促進(法第15条)	(3) 作品等の発表の機会の確保(法第11条)
(2) 創造の機会の拡大(法第10条)	(8) 相談体制の整備等(法第16条)	(4) 芸術上価値が高い作品等の評価等(法第12条)
	(9) 人材の育成等(法第17条)	(5) 権利保護の推進(法第13条)
	(10) 情報の収集等(法第18条)	(6) 芸術上価値が高い作品等の販売等に係る支援(法第14条)
	(11) 関係者の連携協力(法第19条)	

## 推進体制

- 民間団体との連携  
(文化団体、福祉事業所、企業、大学 等)
- 文化施設との連携
- 庁内関係部署